

第9期大学院部会 意見交換における主な意見

第83回

1. 大学院教育の在り方について

【リカレント教育について】

○人文系の立場から見ると、これからリカレント教育により一層取り組む必要がある。ただ、社会人の受け入れ数は必ずしも伸びておらず、むしろ減っている。これは、社会の中で、リカレント教育がどのように位置付けられているのか、なかなか根付いていない部分があるのではないか。一方で、人生 100 年時代ということで、年齢が多様になる。それは非常に結構であるが、現状よりさらに多様となると、何をしたいのか分からなくなる可能性がある。そこを整理する必要があるのではないか。

○資料 5-3 の論点整理の最初に、高等教育機関の規模という話が出ている。この規模は明らかに 18 歳人口のことしか考えていない。18 歳人口のことだけ考えて、今の規模で多過ぎるのではないかというのは言外に匂わされている。一方で、高等教育の修了者の人口に占める割合は、日本は決して高くない。要するに社会人が高等教育を受けていない部分があり、18 歳から 22 歳の大学の在学者の年齢層で、日本だけ際立って 18 歳から 22 歳だけがピークになっている。ほかの国はもっとなだらかに、かなりの年齢層の人たちが大学で学んでいるという状況を考えると、この論点整理もまだ不十分。

○法曹人や職業会計人について日本の場合は、育成に関しては専門学校がとても大きな役割を担っている。リカレント教育を形式面では職業専門協会がやっているが、実態はあまり活発ではない。このリカレント教育と専門職大学院をリンクして何か協力体制を築ければいいのではないか。つまり、狭義のリカレント教育を大学院が担うのか、海外のように職業専門協会が担うのかという、制度設計を話し合わないと、幾らリカレント教育を大学院がやるといっても、大学院は行かなくてよい、自前でリカレントすることになってしまう。そういう枠組みを議論していただきたい。

○専門職大学院は早期卒業がなく、ストレートマスターの場合は 2 年行かざるを得ない。したがって、5 年で学部と大学院を修了しようと思えば、3 年プラス 2 年ぐらいしか考えられないということになる。それを他の修士課程等と同じように 1 年とか 1 年半を認めていただく、また、修士課程が 1 年で、博士後期課程が 3 年という形で、修士と博士が連携しているように、早期卒業制度を専門職でも認めていただけると、何かう

まく博士課程との連携ができるのではないかな。

○実際に、企業で 30 代の方は社会人ドクターとして、大学院に入り直して、実際にドクターを取っている例がある。ただ、その流動性が非常に難しく、企業によっては 3 年間の授業料を払って勉強させる例もあるが、これは珍しい。そのため、学生としてある程度勉強して戻ってキャリアアップしたいという人たちが、職を失うリスク無しに学べるような仕組みを、企業と大学で検討していくことが必要ではないかな。

【修士課程への進学について】

○修士課程は基本的に 2 年間だが、例えば、イギリスでは 1 年間のトートコース (taught course) と、2 年間のリサーチコース (research course) という形で、修士課程の中できちんと役割を分けて考えるという方向性がある。この方向性も修士課程への進学を目指す一つの方策として考えてはどうか。

【博士課程への進学について】

○ヨーロッパでは小中高の教員は大学院卒が当たり前、また、アメリカ等では法曹関係者、公務員は、修士は当然のように出ている。ところが、日本では学士なり、若いうちに資格を取得するなり就職をすることが非常にいいような風潮がある。そのため、大学院への進学者を増やすためには、大学院を出る、修士を出る、あるいは博士を出ることによる付加価値を若い人たちに明確に示す必要がある。そのため、企業における賃金の点だけ書いてあるが、例えば、小中高の教員や、公務員の表れ方がデータとして出てきた方がよい。大学院の高度な人材を養成したときに、日本はどのような将来を考えていくのか、まさに寿命が 100 年となっていくと、日本の社会はどのような形で知的基盤が備えられて、どのような人たちによって日本が構想されていくのか、そういうことについて一般的に議論していただきたい。

【博士学生の能力の価値について】

○日本以外の国では学歴が高いほど社会的なメリットと金銭的なメリットが高くなるということが明らかである。博士人材よりも修士の方が給与が高いというのは、年数やコストの問題でそういう逆転現象が起きていると考えられるが、博士の能力に対する評価は修士より高いにもかかわらず、雇用する側が十分価値を目に見えるような形でリワードしていない。そのため、大学院の学歴のメリットを社会に対して数字で示していく必要がある。

2. 大学院の組織について

【大学経営について】

○研究時間の劣化という課題がある。大学には研究のほかに教育・コンプライアンスなどの業務があり、これらをしっかりと管理型で行うほど手間が猛烈に掛かり、書類が山のようにできる。だが、処理する者の数は変わらず、結局は研究時間の劣化につながる。大学院教育だけ切り出して、それを一生懸命やろうとすれば、際限なくやることはいっぱいある。しかし、教員と研究者は一緒であるため、時間の差配のバランスが崩れてしまう。そのため、両者のバランスを一体誰が取るのか、その観点が議論の中に入っていくとよいのではないか。

○マネジメントの観点と、大学院レベルでどういう収入拡大の道があり得るかという点についても議論してはいかがか。また、リカレント教育との関係でいうと、大学は必ずしも学位プログラムだけやる存在ではないため、大学院レベルで、民間と協力した高度研修プログラムのようなものを作ることがどのぐらい可能で、それはどのぐらい収入獲得源になるのか等についても、今後の議論の中に入れるとよいのではないか。

○外部資金の獲得について、例えばアメリカでは産業界が大学に対してお金をたくさん出しているのに、日本の企業は大学に出していない。この現状を踏まえ、大学の経営そのものの在り方や、産業界の望んでいる大学について議論すべきではないか。

【大学院定員】

○大学院の定員について国としてどう考えているのか。定員充足率や倍率は、定員を少なくすればある程度数字はよくなる。定員の再検討について、個々の大学院だけではなく、国全体として考える必要がある。また、大学院の規模を今後どう考えていくのかについて、検討の方向性があるのか。

【専門職大学院の認証評価の評価について】

○専門職大学院は、認証評価が非常に複雑で、1つの新しい分野の専門職大学院が出てくると、基本はそれに対応した評価機関を作る必要がある。もう少し合理化して、割と広い分野で中核的な評価基準を作り、加えて、個別の分野別評価をしていくような、合理化も必要ではないか。

3. 研究について

【研究資金】

○研究費が総額では増えているという主張もあるが、基盤的経費が減って、その分補助金が増えているだけ。お金の問題について国としてきちんと今以上に投資するというこ

とをしていかなければ、議論しても絵に描いた餅になってしまうソリューションしか出てこない。

【研究人材の採用・多様性・流動性】

○多様性ということ言えば、留学生が増えるのは何ら問題なく、日本のイノベーションとか科学技術の進展ということを考えると、何も日本人の研究者だけがそれを担うという必要はなく、もっと国際化を進めること等が必要なのではないか。

○教員のプライシングはとても深刻な問題。給料が違うだけではなく、年金や、社会保障の関係をトータルで見て、日本の大学は蹴られている。私が所属する小さな大学でも、世界有数の研究者を採ってこようとすると、研究環境や教育環境は評価してもらえるが、給料と年金、要するにキャリアを継続してもらえるかどうかというところで評価してもらえない。大学全体のグローバル化を進めるためには教員の流動性、国を超えた流動性ができるような仕組み作りが重要。

4. 博士課程教育リーディングプログラム及び卓越大学院プログラムについて

【卓越大学院について】

○投資が必要。卓越大学院は、最終的には補助金がゼロになり、あとは全て自前で賄うという制度設計になっていると聞いた。これだと、大学が手を挙げにくいのではないか。

【広報戦略】

○リーディングプログラムの内容に興味を持つ企業が多い。この成果を広く産業界にもアピールすべき。

5. 今後の議論の方向性について

○2040年に日本が、基礎科学力や、イノベーション力、あるいは人々の生活を豊かにするという点で、先頭を走るためにどのような人材育成が必要か、その中で高等教育がどういう役割を果たせるか、その高等教育の果たす役割から考えると、どういう構造になっているのがいいかという方向は常に頭に入れながら、問題意識を検討してほしい。

○特に理系では、修士は当たり前になってきていて、今の民間企業では、実質的にかなりリーダーは修士の方の割合が圧倒的に多い中で、博士課程の人材を23歳から27歳ぐらいをターゲットとして議論をするのは少し現実的でないと思う。博士前期の修士の議論と、博士後期の博士の議論を、ある程度差別化をして、議論するのが将来構想としては重要と考えられる。

具体的には、博士後期課程について、もう少し柔軟に、若手だけではなく、各世代でPh.D

を採るということはどういうことかということに踏み込んだ議論をすることが重要。修士課程については、相当数が進学しているため、一貫教育の重要性はあるが、博士後期は少し幅広い議論で、産業界の中でマスターを持っている方が Ph.D コースを取るのが当たり前で、それが大きなメリットになるような仕組みを作るなど、一步踏み込んで差別化した議論をしてもいいのではないかと思います。

○研究機関としての大学院と、教育機関としての大学院の議論が交じっているように感じる。教育機関としてどうかという観点で言えば、社会が求められているものを提供できているのかという観点が重要になってくると思う。また、研究機関としてということであれば、研究成果がどうなのかという比較の中で議論がされる必要がある。しかし、このあたりが入り交じっているように感じる。この辺を整理していかないと、なかなか方向感が出てこないのではないかと。

○現在、大変なエンジニア不足であり、これは日本の企業だけではなく、海外企業も人材を東京に採りに来ている影響もある。ベトナムでは、非常にグローバル化しており、日本の大学院の中でも、かなりの部分で非常に競争力がある人材を作っている実例もある。やはり専門的な分野であるため、キーワードとしてはトランスファラブルという、日本だけで通用するようなものではなくて、明日ロンドンに行っても使えるような能力を身に着けた人材を輩出するところに、企業はどんどんお金を付けるようになるため、成功している海外や日本の大学院のモデルを見ながら、そのままいいところを伸ばしていくというようなポジティブな方向性で議論を進めるのがよいのではないかと。

○日本は要素技術の面では、大学院の評価が高いが、ビジネスモデル化してマネタイズする力が弱い。その点も踏まえてどのようにして大学院に競争力や価値を付けていくかを考えるべき。

○大学院部会の審議では、博士課程、修士課程が社会にどのように役立つかという観点が強いが、基礎科学力の観点から大学院の教育研究がどうするべきかという観点も入れるべき。

第 82 回

1. 専門職大学院に関する教員組織等の見直し

①【ダブルカウント】

- 教員のダブルカウントが認められると、学部との一貫教育、3年と2年という5年一貫教育が非常に推進しやすくなる。
- ダブルカウントの考え方がよくわからない。大学設置・学校法人審議会の際に兼務教員としてカウントされるのか、それとも2つの部局の専任教員としてカウントされるのか。
⇒設置申請するときに、2つの部局の必置教員数としてカウントできるという意味。
⇒現行制度では、学部と修士課程、博士前期課程と博士後期課程については、それぞれ1カウントずつできることになっており、1人の教員が3つの課程の専任教員としてカウントできるのが現行制度である。それが、専門職大学院は、学部との兼務を認めていないところを、今回、緩和するということ。

②【みなし専任教員の要件緩和】

- 実務家教員の授業に対し、学生は非常に興味を持っているため、専門職大学院に関する教員組織の見直しについて手続き的に、あるいは法令上も認めていただけると非常にありがたい。
- 社会人の学生と学部の学生との交流会を設けると、非常にうまく行っているように思うが、教員の負担が問題である。1科目の必要コマ数の改善や実務家の非常勤の方に委ねることである程度解決できるのではないかな。
- 現役で活躍している方に実務家教員として来てもらうために、現在の1年に6単位以上の授業科目担当というのを多少緩和してもいいのではないかな。
- 緩和に賛成。現行で「教育課程の編成その他専門職学位課程を置く組織の運営について責任を担う者」とあるが、これは、実際上は相当柔軟に行われていると考えてよいのか。必ず教授会に参加するべきなのか。
⇒教授会のメンバーとして大学の運営に責任を頂いている。ただ、みなし専任教員の大学運営参加率は全体で1割超しかない。
- 結局、4単位ということは、非常勤の場合でも十分あり得る授業負担。ただ、非常勤とみなし専任教員の違い、今御指摘、説明があったように、その研究科の専任教員であるということで、教授会を含むマネジメントにきちんと参画してほしい。基本的には教授会に参加して、運営にはコミットしないということになっており、そこが非常勤とみなし専任教員の考え方の違いである。
- 賛成。目覚ましく環境が変わっているときに、産業界からすると、リカレント教育というのは、非常に重要だろう。そのため、専門職大学院が非常に魅力ある大学院になり、産業

界から人が行くということは重要。また、教員も産業界から送ることが重要。この動きを是非加速してほしい。

③【その他】

- ビジネススクールに来ていただきたい実務家の方々が多忙であるため、何か対応が必要ではないか。
- リカレント教育に関しても実務家教員の協力が必要。
- 学部、大学院一貫の専門職課程は、もともと学部で広範な基本的な知識を教育した上で専門職を育成するという考え方である。特に国際的に同等性を持った会計士を育てることは、今後極めて重要であると思いますし、国際会計基準がどんどん入り込んできているという実情を踏まえ、きちんとした形で会計士が育成されるのは重要である。

2. 卓越大学院プログラム

①【過去の議論の確認】

- 博士課程の強化について議論するのであれば、大学院部会として、今までどういう議論が行われてきたかをまとめたリストを出してほしい。でないと、過去の議論と同じことを、同じフェーズで繰り返すということは、非常に大きなロスになる。
- 1 学年 1 万何千人いる博士の規模の中で、この卓越大学院プログラムによって、何割程度をカバーするのか。そその規模感を議論されたのかどうかということを確認したい。

②【今後について】

- 財源が幾ら必要になるかは、そのプログラムの作り方、施策の作り方による。マルチファンディングがあるように、今までのような給付ベースに近い学生の RA 支援で財源を積み上げるとすると、財源は即規模に直結することとなるが、そこは発想を変えるべき。そして、国づくりとしての博士の位置づけを行い、学位プログラムという非常に明確化された形のディグリーを博士課程リーディングプログラムで体系化したため、それを広げる中で位置づけるのが筋。
- 事業費で賄った人間だけを育成するという時代は終わり、この卓越大学院プログラムの事業費で大学ごとに大学院教育改革を、スモールスタートアップすべき。
- 卓越大学院プログラムで、規則で縛らず各現場の先生方に、うちの大学は、アカデミックではなく社会、企業で活躍するドクターを専ら育てるというような特徴出しを実施する仕組みを入れていただきたい。
- ダブルカウント・知のプロフェッショナル・大学院のシステム改革をリンクして考えると、例えば、卓越大学院プログラムで国際マーケットの中で勝ち抜ける「知のプロフェッショナル」を作るためには、日本で強い分野を新たに作るか強化するしかなく、外国より明らかに卓越している部分を融合分野で作っていくというのが、1 つの戦略ではないだろうか。

その際に、いろいろなところが制約になると予想されるため、もし卓越大学院プログラムを大学システム改革として使うのであれば、ボトムアップでいろいろな制約条件をオープンにする提案を受け入れるような仕組みを作っておくとよいのではないだろうか。

3. 大学院教育の在り方

①【博士課程への進学】

- テニユアトラックのように、企業に籍をキープし、ドクターコースでの研究を集中して行い、もし企業がある程度の見合った給与を出してくれれば、仕事と研究が両立でき、かつ優秀な人が定着してくれる。かつ、3年間でその人を採用するかどうか判断できるようなゆとりの幅を制度として考えていただければ、博士課程に進む学生はかなり増えていくのではないかな。
- バーチャル研究所のようなイメージがある。60億円ぐらいの予算で、1,000人規模の学生をポスドク、あるいはDC1、DC2として採用し、研究費と給料を支給すれば、将来の研究者としての足掛かりを作ることができるのではないかな。また、バーチャル研究所に登録することにより、バーチャル研究所から各大学へ、各研究所へ将来のテニユアトラックとして採用する可能性やチャンスが出てくるのではないかな。
- 米国パデュー大学では、大学院の5年間で研究者としての基礎を養う目標を大学の入学時に示している。これにより、大学のプロセス全てが、卒業後の学生にとって、自分が何のポジションを得られるのかということを明確に示している。このような取り組みは、学生が大学院に進む目標感・目的感を持たせるためのいい制度になるのではないかな。

②【博士課程リーディングプログラム】

- 博士課程リーディングプログラムは、企業側や委員の方からかなり肯定的な意見を頂いている。そのため、人文・社会科学系に対して、求める新しい価値観や知を提言していただければ、対応した何かを創造しやすくなるのではないかな。

③【専門職の博士課程】

- 会計は国際的なレベルで全て動いており、社会的な貢献、環境面など、非常に会計の領域が広がっている。ただ、今の専門職の修士だけでは、他の博士課程との連携がうまく保てず苦心しているため、是非ここでも専門職の博士課程について、お知恵を頂きたい。

④【グローバル化への対応】

- 学位の問題に関して、修士という学位が世界で通用している学位と、通用していない学位とあり、そのところは非常によく注意しなければならない。
- 日本の大学院教育の中で、もう少し人文・社会系で、とりわけ日本について教育研究する場合の博士課程では、英語で議論、討論、その他の授業ができるレベルまでやっていただ

きたい

○制度的には多様化しているが、主体の学生側が非常に均一化していて、昔のように切磋琢磨していない。それは、外から入ってくるものがあまりないためと考える。

現在海外では、他国から自国の大学に優秀な者が次々と入ってきており非常にコンピティティブになっているが、日本だけがコンピティティブではないように私には見える。これが非常に大きな質的な問題を起こしている。そして、昔の大学院生の留学のように、修羅場をくぐるようなプロセスが、余りないように感じる。そのような点が、日本の、少なくとも我々の領域では弱さになっている。これにどう対応していくかというのが、大きな課題ではないか。

4. その他

○文部科学省以外の省庁のお金を使ってドクターコースを充実させてはどうか。例えば、寄附講座のような形で、ある省庁がある部分を強化する目的で講座設置に必要なお金を拠出してもらい、産業界からそれに合う優秀な人材を出してもらうことで、官民が連携した新しい講座のスタイルを設置するのはどうか。あるいは、国やほかの省庁が、今後必要になる研究をピックアップし、各省庁が大学を選び、そこにある分野で講座を設置することで、そこに大学の内部と産業界から人材が入っていけるとなると、産業界は、人件費を負担するのではないか。さらに、国やほかの省庁が、ある分野を強化したいのであれば、例えば農水省がお金を出して、産業界が人材も出して、一緒になって講座を作れば、若手教員の枠もその間増えるのではないか。

○国全体としてスピード感を持ち、何ができるかということをつえ、その中で、大学における大学院教育というものの価値およびストックの価値を可視化し、それを活用するという方向で主張していくことが必要である。

○スピード感が極めて重要で、団塊世代の方が 2025 年には後期高齢者になる。そこまでに働き方改革を実施すべきであるから、ここ 5、6 年の間に、価値ある転換がどうできるかと見たときに、これから育つ人の育成だけではなく、既に育てたリカレントの高度化は、極めて急務である。そういう意味で、今までの 21 世紀 COE, GCOE, 博士課程リーディングプログラム等、様々実施してきた中のストックを、どのように最大活用して、パラレルに全てを動員できる施策を打てるかということを考える必要がある。そして、今回実施する卓越大学院も、それを後押しできるようなものをうまく仕込むということが極めて重要である。

○大学院のインフラの価値が 5 年前、10 年前とまるで違うほど価値があると考えられるため、それをどう生かすかということを行う必要がある。

○本当に日本の大学院の根幹、在り方が、いろいろなプログラムに応じた学位等へシフトする動きなのかどうかというのが、私は現場に近いところにいるが、まだ見えない。コンセンサスがどのように取れるかというのは、大きな課題として残っているのではないか。

- 人文・社会科学系の課題に対して、政策的に対応するときには、規模も重要だが、変化の兆しの部分をどう捉えて促進していくかという発想も重要ではないか。
- 博士のプログラムばかりでなく、修士のプログラムについてもこの場で議論していただきたい。参考資料内に、ドクターとマスターと専門職学位の推移を表している棒グラフがある。それを見ると、ドクターが減っているが、それ以上に修士が減っているのではないか。また、社会科学系は、特にマスターの落ち込みが大きいのではないかと思うが、よく見ると、農学部なども結構マスターの落ち込みが大きいなど、さまざまなところに問題が起こっているのではないか。
- 将来の日本の在り方を踏まえて、日本の大学院がどうあるべきか、どういう形で人材育成すべきか、我々は「知のプロフェッショナル」としての Ph. D, あるいは博士という学位を持った人たちが世界で活躍することが重要だというところに重点を置いてずっと検討してきたが、それだけではないということも、併せて検討する必要がある。併せて、専門職大学院の話もあるため、将来を見ながら大学院の在り方を検討するということは必要であろう。

第 81 回

1. 入学・修了関係

【博士離れ・志願者の確保】

- 大学院教育だけではなく、学部教育、初等中等教育から、将来の我が国を牽引する「知のプロフェッショナル」育成を一貫して行う必要があるのではないか
- 博士は入学者以上に志願者が減り選抜が機能していない恐れすらあるのではないか。博士課程、アカデミア、研究者というものの魅力が低下しているのではないか。
- 博士に進学してもらうためのリクルーティング、マーケティングがなされていない。優秀な学生をリクルート合戦してもおかしくないのに、当然のように優秀者が進学して来るはずだという前提で課題をとらえていないか。
- 学生生活を送る中で近くに魅力的な博士人材がいることが、意外と進学動機を中心に近いところにあるように見える。
- 日本型の教育は修士から研究を軸としてしまい、博士もその延長線に過ぎないことが魅力のない一因ではないか。修士はスクーリング中心で博士になったら研究するようになれば変わるのでは。

【出口・キャリアパスの多様化】

- リーディング大学院と一般の博士課程の進路の違いについて分析はなされているのか
- リーディング大学院の学生は産業界としても実際欲しい人材。就職に有利であるという評判が立ってくると良い流れになるのでは。
- ドクターを取ってからの就職について、日本企業は相手にしてくれない一方、外資系企業は経験をプラスに評価してくれた。日本企業にもう少し頑張ってもらいたい。
- 企業活動において海外と話をする上では **Ph.D** を持っているということは評価してもらえる。研究のみならず、テクノロジー系の仕事をしていく上でも **Ph.D** は非常に重要ということも示すべき。
- 企業においても高度な **IT** リテラシーや数学、**AI** など様々な分野で深い知識が求められている。大学院を出る高度人材に対する需要は今後大きくなりこそすれ少なくなることはないだろうが、そういうリーダーになりうる人材をどう育成していくかというハウターのところをもっと産業界と大学で議論をしていくべきではないか。
- 一律で博士課程として考えるよりも、多様な個性を持った人材として展開していくのがよいのではないか。
- 博士の経歴の多様化を進めていくと、皆が博士の有用性を理解することに繋がるのではないか。

【博士の活躍状況の可視化】

- 日本社会全体としての能力向上のために博士課程がどのくらい役立っているかを示さねばいけないのではないかと。博士課程を出て社会で活躍している人材がどれほどいるのか、ということ調べていかないといけないのでは。
- 理工系は、就職に有利だからという理由で進学している学生が多いため修士課程の進学率が非常に高いが博士に進学しない。Ph.D の取得が「知のプロフェッショナル」としての称号を与えられることだという認識を学生が持てていない。
- グローバル企業における Ph.D ホルダーの数であるとか、採用時の処遇などについて具体的なデータがあると、活躍する博士のイメージがつかみやすいのではないかと。

【人材流動性の向上】

- 人材の流動性を高めていかないと、いくら社会人博士の数が増えても社会に浸透していない。
- アカデミアに入ってから、あるいは産業界に入ってから、相互に動くようなセクター間の流動性が未だ非常に低い。一度企業に勤めてから大学教員に異動する、あるいはその逆とすることができるように改善を図っていくべきではないかと。

2. 教育内容・カリキュラム関係

【グローバル化対応】

- グローバル化対応については遅れているのではないかと。会社で MBA を取得するにしても費用負担をしているのは海外ビジネススクールの TOP20 や海外のロースクールに派遣し現地弁護士事務所でのトレーニングを行わせる等の方が、企業にとっては望ましいという状況。ぜひグローバル化の視点も大事にしてほしい。
- 博士人材は外資・金融の観点でも優秀で良い人材は是非取りたいと考えている。しかし、国内大学出身者と海外大学出身者を比較してみると、マネジメント能力や英語でのコミュニケーション能力が弱い。博士人材はすぐ経営サポートができるような素養を持って入ってきてほしいが、欧米の方に比べて地頭では負けないが、即戦力という意味では厳しい現状。

【組織の枠を超えた人材育成】

- リーディング大学院を実際に運営してみて、このプログラムを成功に導くのは大学の教員だけでは無理があり、産業界、行政、国際機関などの人々が一緒になって人を育てていく意識を持つことが必要と感じる。特に事業期間が終了した後のことを考えると、教育機関以外の組織も一体となって人を育てていく体制が必要になる。

【生産性の向上】

- 部局の壁を取り払い生産性を高める仕組みを考えることが必要。日本の大学は、自部局ですべてを取り込もうという意識、学部学生や修士学生を博士まで自分たちで面倒をみようという意識が強すぎるのではないか。その点からいえば、サブプログラムやサーティフィケートという形の学位プログラムは一つの解に近いとも感じている。

【人文・社会科学系の課題】

- 文理融合に重点を置く博士課程については理系とは違い、産業界の採用現場は前例もなくかなり困惑。学生を受け入れてもらうのに苦労した。
- 文系の大学院はアカデミア志望の学生が大多数というのが現状で、産業界も文系博士に対して門戸を開いているとは言えず、奥の深い問題と感じている。
- 文科系の博士は教員以外の進路が見えてこず、多くの大学院の博士課程は留学生ばかりになっている状況を踏まえるべき。
- 人文系については色々と議論があり、学問としての必要性は随分と応援もして頂いたが、人文系の教育の在り方がこれでいいのかという点は何も解決していない。
- 大学の中でも人文系が何をしているか見えていないところがあり、また、国の政策などの対象とならないことも多い。リーディング大学院にも関与しているがメインストリームではなく、人文系として何をすべきかを見えてくるようにすることは大変重い課題。

3. その他

【専門職大学院】

- 専門職大学院の必置教員の柔軟化を考えるべき。教育現場で必要なのは最先端の実務家だが、5年前、10年前の内容を教える教員となるケースも。実務家教員の雇用後のキャリアパスや能力審査、現役実務家の活用方策（ローテーション方式や優遇策の検討）を検討して頂きたい。

【リーディングプログラム】

- リーディングプログラムの支援終了後、プラスアルファの留学やインターンシップなどがなくなると元に戻ってしまうのではないかと危惧。
- 技術系では博士採用はこれまでも大量に採用は行っているが、リーディング大学院のオールラウンドプログラムは非常に評判も良く、産業界としてはみんな欲しがっているのではないか。
- リーディング大学院は、現時点の目で見ればもっと企業就職の割合が高くても良いと思える。理工系の修士で普通に就職できるのは、そこはマッチングが上手く行っているから。博士課程の特色を生かした産業界とのマッチングの仕組みを考えて、例えば8割は企業に就職するような方向を考えてもよいのではないか。

- この 10 年博士課程に集中的に予算等を投下してきたが、対象以外には波及していない。
- 博士のキャリアパスについていえば、リーディングの上手く行っている取組をどう他の大学にも展開していくかということが非常に大事。

【社会人の学び直し・博士課程への社会人入学】

- 社会人が大学院に戻ることに躊躇する状況。企業がフルサポートしないような、自ら時間を見つけて大学院に通う社会人や、退職して大学院に学び直しに来る社会人のモチベーションを上げるためには何をすべきかを議論できると良いと思う。